

# インド NGO-JICA ジャパンデスク



## ニューズレター 2012年1月号



インド事務所よりナマステ！北インドで春の訪れを祝うお祭り、バサンタ・パンチャミが行われ、少しずつ寒さが和らいできました。今月号は、青年海外協力隊事業とNGOの連携、日本企業と協働するNGOについてお届けいたします。

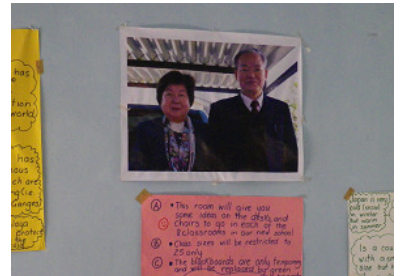
### JICAインド初の試み 青年海外協力隊のNGOへの派遣 アンドラ・プラデシュ州 New Hope

ニューズレター2011年5月号、2010年6月号でご紹介した、オリッサ州、アンドラ・プラデシュ州で活動するインドのNGO、New Hopeに青年海外協力隊員が派遣されることになりました！インド事務所の中坊容子企画調査員（ボランティア）による、隊員の着任レポートです。

1月11日、アンドラ・プラデシュ州コッタバルサにあるNGO New Hopeの Katagiri Children's Village に青年海外協力隊の川並裕子隊員（23年度短期隊員・小学校教諭）が赴任しました。

Katagiri Children's VillageはインドNGO New Hopeが運営し、新潟県の片桐ご夫妻が運営するNGO 教育と環境の「爽（さわやか）」企画室が支援する、孤児、障害児童、HIV感染児童といった、事情により家族と暮らすことができない子供たちを保護し教育・職業訓練を受けさせる施設です。現在95名の7歳から16歳までの子供たちがここで暮らし、勉強をしています。同校では教養としての日本語の授業も設けており、今回青年海外協力隊の要請がなされました。

教室の壁に貼られた片桐ご夫妻の写真→



川並隊員は2009年6月から2011年6月までホンジュラスに青年海外協力隊・小学校教諭として派遣されており今回が2回目の協力隊参加です。今年の4月からは神戸市の小学校に勤務することが決まっており、その合間を有効活用して協力隊に参加しました。今年の3月末まで毎日3コマの日本語の授業を担当するとともに他の教科のお手伝い、子どもたちと交流を行う予定です。

「こんにちは！」学校に到着すると、川並隊員は子供たちとスタッフの皆さんの温かい笑顔とフラワーシャワーによる歓迎を受けました。隊員が「よろしくお願いします。裕子先生と呼んでください」と日本語で挨拶すると、子供たちは「ゆーこせんせい、ゆーこせんせい」と一生懸命繰り返している姿がとてもかわいらしかったです。



川並裕子隊員

フラワーシャワーでドレスアップした隊員に学校の第一印象を聞いてみました。  
「子供たち・スタッフみんなの笑顔がとても素敵」  
「みんなフレンドリーで優しい。子供たちが進んでお手伝いをしている姿がすばらしい」

「良いことも悪いことも含めて全てを楽しみたい」「3ヶ月弱という任期けれども結果を焦らずにやれることをやりたい」と意気込みを話す川並隊員、同NGOへの初代派遣隊員としての活動に期待です。

JICAではボランティア事業とNGOとの連携の強化に取り組んでいますが、JICAインドでは青年海外協力隊をNGOに派遣するのは2006年のインドへの協力隊派遣再開以来今回が初の試みです。これを機にJICAボランティアとNGOとの更なる連携を模索していければと思っています。



NGO New Hope 代表のRoseさんご一家が迎えてくださる



先生たちとの顔合わせ



## インド農業の背景

農業はインド人口の60%が従事する基幹セクターですが、このセクター成長率はGDP成長率を下回り、年率9%の成長をめざすインド経済においては、最大の不安要因とされています。そのためインドにおける農業の活性化は、第11次5カ年計画（2007～2012年）でも最重要課題です。

農業生産が伸び悩む要因のひとつは、雨水に依存した農業形態です。降雨変動は農作物生産の豊凶に直結しています。雨水依存地域はインド全土の60%にのぼります。こうした状況を改善するために灌漑設備を整備し、悪条件でも作物が生育するように農薬や化学肥料を使用したり、改良種や遺伝子組み換え品種を育てたりします。しかしこうしたやり方は、知識や経験を伴わない場合、さらに農家を疲弊させます。

## 農家の苦しみと自殺

収穫量を上げようと農薬・化学肥料、遺伝子組み換え種子を購入するために多額の借金をし、返済が滞って自殺する農民が2005年頃から急増します【ニュースレター2010年9月号参照】。またこういった農薬や化学肥料、遺伝子組み換え種子には大量の水が必要で、水をめぐる争いを激化させたりもします。

さらに、健康被害が深刻です。農薬や化学肥料をマスクもつけず素手で散布するからです。恒常的な頭痛や吐き気、皮膚病、呼吸器系の疾患が顕著で、これらの治療費もかかります。

加えて児童労働の問題もあります。コットン生産に関わる労働者の60%は子どもで、そのうち7割は女兒だといわれています【JICA『インドにおけるオーガニックコットン生産の概況』p.56】。子どもが労働力として用いられるのは、①大人より賃金が安くて済む、②従順に働くからだといわれており、受粉や収穫の場面で長時間の単純労働を強いられます。

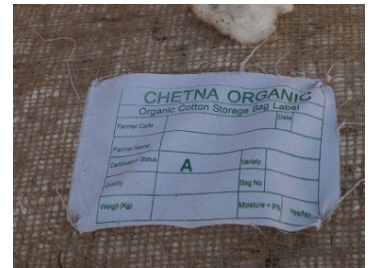


オリッサの綿花

## チェトナ・オーガニックの活動

こういった問題に取り組むため、チェトナ・オーガニック（以下「チェトナ」）は活動をしています。小規模農民や小作農を対象に、有機栽培を通じた生計手段の選択肢を広げるための活動です。

有機栽培に切り替えることで、健康被害を軽減し、収入向上を図ります。農家の生活が改善されれば、子どもを働かせる必要もなくなります。児童労働の認められる畑からは購入しないようにすれば、児童労働の削減にも資することになります。特定の作物栽培に一点集中すると、不作時に打撃を受けるので、混植（複数の作物を同時に栽培すること）でリスク分散も図ります。



チェトナ綿花であることを示すタグ

## 悪循環を断って対等な関係をめざす

チェトナの本部はアーンドラ・プラデーシュ州で、その他にもマハーラーシュトラ州、オリッサ州を主な活動場所としています。今回はオリッサ州の事業地カラハンディを訪問しました。ここでは2004年からアディヴァシ（インドに居住する先住民の総称）の土地なし・小規模土地所有農民の支援が行われています。立場が弱く借金漬けになりがちな農民を対象に、有機栽培作物を市場で販売することで、農民の健康被害の軽減と児童労働の削減、生活向上を図ります。貧困一借金一出稼ぎの連鎖を断ち切ろうという試みです。



↑ 小型ジニング機

たとえば、ある村ではオーガニックコットン栽培をしています。収穫した綿花は各村から荷車で集積所に到着して品質や量をチェックされ、そこからトラックでジニング場に運ばれて綿線り（ジニング）という工程に入ります。現時点では、ジニング場がどの綿花をどのタイミングでジニングするかを決定しています。オリッサ州にはジニング場は3社しかなく、ほぼ独占状態にあるからです。

こういった状況に鑑み、チェトナは農民が自前の小規模ジニング場を運営できるようにしたいと考えています。農民がジニング場をいきなり所有・経営するのは難しいので、当面は、小規模なジニング機を村単位で購入して、これまでジニング場に運んでいた際にかかるコストや時間を削減する計画を立て、一部地域で導入しています。

オリッサの当該地域における支援は、多分にアディヴァシ支援の意味合いを持ちます。土地所有の概念を持たず固有の文化の中で暮らしてきた彼らは、英国の植民地化やインドの近代化の中で翻弄され続けました。現在は政府による留保制度などを活用しながら、伝統文化を維持しつつ自立する道を模索しています。チェトナの仕事は、いわゆるメインストリームのインド人と、アディヴァシなどのマイノリティを対等な関係で結びつけるものです。（榎木）



村の様子（於ランジガ）



集まった村人（於ソトウパダ）



村内を通過する綿

# 草の根技術協力事業 思春期女性自立支援プロジェクト 事業締めくくりイベントが開催されました

2012年3月末に終了を迎える草の根技術協力事業（以下、JPP）「思春期女性プロジェクト」の締めくくりイベントがmamtaの運営するジェンダー・リソース・センターで開催され、地球市民ACTかながわ（以下、TPAK）事務局から近田代表、バックレイ副代表、伊吾田事務局長、プロジェクトマネージャーの竹内氏、mamta・サマジク・サンスタ（以下、mamta）からシン代表とチーフコーディネーターのビーナ氏、JICAインド事務所から渡辺次長と釘田NGOデスクコーディネーターが出席しました。また、インド政府からは保健・家族福祉省 Sate TB Officer (デラドゥン) Dr. Ajeet Garola、同省結核対策 State Medical Officer (デラドゥン) Dr. Rajendra Arolaが出席し、思春期女性に向けて力強いメッセージを送ってくれました。

ビーナ氏によると、招待した思春期女性約100名に対し実際の出席者は238名と、事業に対する関心の高さがうかがえました。また、村の男性サポートグループのメンバーも参加し、ステークホルダーが集って事業の振り返りと今後への展望を共有する、とても有意義なイベントとなりました。女の子たちからは、「プログラムに参加して外の世界を知ることができた」、「自分がプロジェクトで学んだことを他の女の子に伝えていきたい」と言った前向きな発表がありました。

TPAKの近田代表は「JICA事業の終了は、今後もプロジェクトを続けていくための一つの区切りであり、現地との関係が終わってしまうということではありません。」と話してくれました。TPAKがタイで教育支援した子どもたちがプロジェクト実施の20年後に先生になったという成功例を引き合いに出しながら、現在支援している思春期女性たちが5年後、10年後に結婚して母親となった時にこのプロジェクトで身に付けた知識を自分の子どもに伝えてくれることを願いつつ、今後も何らかの形でTPAKとしての支援を続けていきたいと話してくれました。（釘田）



きらびやかな刺繍はセンターで習った技術



mamtaのGRCは宿泊施設付の研修センターとして機能している



ホールに入りきれないほどの女の子たちがイベントに詰めかけた

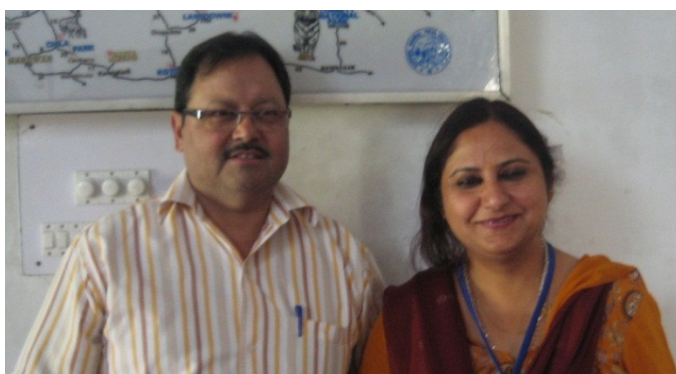


JICAインド事務所渡辺次長が締めくくりの挨拶を行った（左からバックレイ氏、ガローラ氏、近田氏、渡辺次長、釘田、竹内氏）

## TPAKの現地パートナーNGO mamtaについてご紹介

mamtaの設立は1992年、基礎医療の普及、ジェンダー格差の解消、住民参加等を通じた持続的な開発を目的掲げ、主に女性や子どもを対象に保健分野で活動を行っています。現在、TPAKとのプロジェクトの他、インド政府がグローバルファンドから拠出された資金で行う結核・HIV/AIDS対策事業を受託し、ウッタルカンド州全域とウッタル・プラデーシュ州の西部で活動を行っています。

mamta代表のシンさんとチーフコーディネーターのビーナさんを中心に事業スタッフ達が対象地域の村を定期的に訪問し、村長やパンチャヤト（村落自治組織）、アーシャ（村落保健ワーカー）やアーガンワディ（村落栄養ワーカー）といったステークホルダーと話し合いを持ちながら、村で啓発イベントを行ったりしています。市民活動が活発なインドでは、政府政策の中でmamtaのようなNGOが直接コミュニティに働きかけるアウトリーチの部分を担っており、社会開発において欠かせない存在となっているのです。（釘田）



シンさん（左）とビーナさん（右）

## 編集後記

TPAK-mamtaのJPP事業締めくくりイベントでは参加者から事業終了を惜しむ声が多く聞かれました。3年という事業期間の中で女の子たちに学びあう機会と場が提供されましたが、それを今後どのように発展させていくかはコミュニティの協力と女の子たち自身にかかっています。TPAK-mamtaからのフォローが何らかの形で行われる予定ですが、当事業の成果がコミュニティに根付くように私たちも見守っていきたいと思います。（釘田）